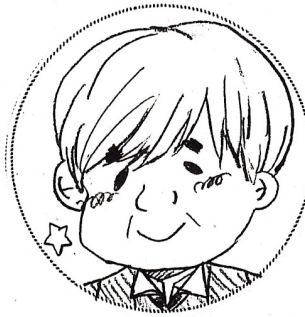


学校だより 希望の鐘

ひとつのつぼみはちどしかにひらかない



八 戸 市 立 小中野中学校

平成28年5月30日(月)

No.42

文責：校長
工藤聡

「 I 君 の ウ ニ 」

先日(5月3日)の5月3日、私が学年主任を務めていた時の生徒同士の結婚披露宴がありました。乾杯の挨拶を頼まれたこともあって、快く出席しました。新郎は、当時先生に注意されたり指導されると、それが「面白くない」と言って、プイと学校を飛び出すことが何度かあった生徒でした。ただ、反省するのも早く、私が迎えに行くことがわかっているのか、玄関の呼び鈴を鳴らすと1秒くらいで出て来るのが常でした。披露宴には、同級生同士のカップルということもあり、40名ほどの生徒も出席していました。近況をたずねてみると、各自のステージでそれぞれ頑張っていることがわかり、ホッとすると同時にうれしさがこみあげてきました。

彼らが中学生の頃は、私の指導のいたらなさもあって、やんちゃな生徒が多く、想像もできないほど大変な時代でした。学年主任としての私が、本気で修学旅行をやめようと考えたくらいです。

それが、10年もたたないうちに驚くほど成長したことに感激するとともに、私が彼らのゴールを中学校の卒業としか考えていなかったことに深く反省させられました。そして、やはり私が学年主任として担当し、12年前に中学校を卒業したI君という生徒を思い出しました。

6年前の6月のことです。他の中学校の教頭を3年経験し、再び教頭で出る前の中学校に戻っていました。職員室にいた私を、生徒が「お客さんが来た」と言って呼びにきたのです。玄関に行くと、そこには何となく見覚えのある一人の青年が立っていました。その青年は、「工藤先生、戻ってきたんだ？びっくりしたじゃ！」と言って、何かが入ったバックを差し出すのです。その瞬間、『I君だ！』とすぐ思い出しました。

I君は、中学生の頃は学校を休みがちで、高校も一年ちょっとでやめたようです。そのまま通学していれば高校2年生であるはずの6月、突然I君が学校に、ウニを持ってきたのです。「頼まれて浜の方に手伝いに行ってきたが、ウニをもらった。先生たちにも食べさせたくて持ってきた。」というのです。そして、翌年も同じ頃、ウニを持って学校に来ました。それが、5年を経過しても続いていることにびっくりしたのです。年が経過するにつれて、I君を知っている先生は少しずつ減り、4～5年もすると誰もいなくなったようです。それでも、I君は毎年ウニを届けてくれていたのです。I君のことをよく知らなくても、先生たちは『ウニのIさん』と呼んでいたというのです。自分が在籍していた頃の先生はいなくなっても、お世話になった学校に毎年ウニを届けるという行為は、誰もがすることではありません。中学生の頃は、学校を休みがちだということで、心配したお母さんから何度も相談を受けました。高校を中退したことは、I君の妹から聞きましたし、妹にまで「いつも兄が面倒をかけて…」と言われていました。しかし、そんなI君も着実に成長していたわけです。I君のゴールが、高校の卒業だけであるならば、彼はゴールを迎えられなかったことになります。しかし、多様な現在の社会では、卒業はあくまでも一つの区切りや節目であってゴールではありません。さらに、これまでは、ゴールするにも、誰もが前を向いて全力疾走でなければ認められないような雰囲気もありました。また、ゴールも一律に同じものしか認められていなかったようにも思えます。ただ、現在は、個人によってそれぞれゴールは違いますし、ゴールの仕方も「後ろを向きながら」とか「誰かに支えられて」とか様々あると考えられているのです。

3年生は、修学旅行を終え、これから最後の市中体夏季大会へ向けた練習に入ります。残り10か月間で、さらにいろいろな行事や経験をし、いずれは小中野中を卒業していくことになります。2年生や1年生も同様です。いろいろな行事や経験が人生の節目となったり、中学校生活の区切りになっていくことでしょう。しかし、最終のゴールではないのです。うまくいかないことがあっても、それを糧とすれば、次の節目では、納得のいく結果が得られるかもしれません。それが、自分を“成長させていく”ことではないかと思えます。

先日の披露宴とI君のウニからそんなことを考えさせられました。I君は、現在仕事も決まり、休みもとらずに働いていることを、彼のお母さんから聞きました。忙しいI君ですから、7年続いたウニは途切れてしまいました。でも、彼の成長はどんどん続くのではないのでしょうか。